

# 町民のひろは。

## 自慢あれこれ

### ⑰ 大原幽学来泊の家



▲享保元年に建築された家屋 (円内は海保忠さん)

屋形宮前の海保忠さんのお宅には、江戸後期の教育家で、今日の産業運動の祖を成したと言われる大原幽学(一七九七〜一八五八)が来泊、滞在した家屋が現存している。

この家屋は享保元年(一七一六)に建てられたセンガイ造り(軒先の裏の竹が見えないように板で蓋をした造り)で、現在、卯建(うだち)はなくなつたが、黒光りした太い梁や柱、部屋の広さなどからは当時の面影をしのばせる。幽学と海保家との親交は深い。

当時、九十九里浜一帯に勢力を誇っていた海保忠左衛門(海保忠さんの先祖)が、村の公用で江戸藩邸へ出向いた帰り路に、東金の旅館で偶然幽学と泊りあわせ、意気投合して、それが機縁となり、海保家への来泊を勧めたのが始まりである。とされている。

幽学は、以後たびたび海保家を訪れるようになり、海保家で近隣の人びとを集めては講義をするなど、ひたすら庶民教育の実践に努めていたようである。

我が町と隣の光町の境にある栗山川は、最近汚れが目立つようになった。

栗山川をきれいにするために、多くの人達が標語や作文を書いて呼びかけている。それにもかかわらずいっこうに栗山川はきれいにならない。川にも命があるのだ。



## 栗山川をきれいに

押尾浩美(横芝中三年)

魚が元気に泳ぎ、水草も適当にあり、水がすんでいるのなら、川は元気なのだ。

しかし、今の栗山川は病気だ。水は濁っている。魚もあまりとれないし、ゴミは、空き缶、紙くず、時には動物の死がいまでが、流れている。

この川をきれいにするには、ど

うしたらよいのだろうか。

それには、まず第一に、一人ひとりが川を汚さないという自覚を持つことが必要である。

「ちりもつもれば山となる」ということわざがあるが、栗山川のゴミの山も、まさにそれである。いくら住民の何パーセントかが汚

すまいとしても、あとの何パーセントかが協力しなかつたら、きれいになるはずがない。自分のたったこれだけのゴミだから……など

と思いつながら、汚してしまう。私達みんなの川だから、自分達できれいにしていかなければならないのだ。

第二に、管理が必要である。月

芝焼くや古りし古銭が一つ出て

藤代 ゆう

雑踏の中に春愁まといをり

津田 若菜

春愁の一人の部屋を灯しけり

若梅 あやめ

芝焼きの煙りにむせつ溝さら

鈴木 南知

春愁や薄日のままに海暮れる

池田 和代

春愁の疑い深き胃を持てる

海保忠穂子

に一回でも、みんなで、栗山川を

そうじしたら良いと思う。そうすれば、川はきれいになるし、それを見た人達も、栗山川を汚してはいけな

い。そして、今までにゴミを捨ててしまった人も、そつと反省するに違いない。

みんながこのようなことを実行に移して行けば、よそから来た人びとにも、よい印象を与えるし、また、町の人達自身も、よい気持ちができるだろうと思う。そして、いつか、数十年前のあのきれいな栗山川にもどるだろう。

みんな、私達の栗山川を、私達の手できれいにしよう。きっと元気になるはずだ。魚が元気に泳ぎまわる、すんだきれいな川に、もどれるはずなのだ。(栗山川浄化啓発作品集から)

春愁や屋根の雫がまだ続き

大沢 竹王

春愁や友の帰りし後の閑

向後 雅子

春愁や医に通う日が句座となり

安井ゆづる

隣村と共同作業の堤焼く

三枝 句城

春寒し舌にざらつく打粉菓子

次回

日時 五月四日(金)

兼題「棕櫚の花」「母の日」

## 横芝句会三月例会



春愁や万古の急須艶少し

土屋 栗水

句に生きて齢八十路の春思かな

石川 奇水

時折は山に眼を置き芝を焼く

成田 様子

宇井 芝童